

所 陵

No. 8

関西大学考古学等資料室集報

昭和58年11月1日発行



刻字甲骨(殷墟小屯出土)

目 次

古墳時代人の生活……………	2
箸墓についての若干の所見……………	3
二人のエジプト学者……………	4
パプア・ニューギニア南西岸のカヌー……………	6
橿原市千塚資料館のことども……………	8
東北地方巡検記……………	9
池大雅墓碑拓本……………	10
資料紹介(石器資料4点)……………	11
編集後記 他……………	12

古墳時代人の生活

—資料室公開にあたって—

横 田 健 一

ここでいう古墳時代とは、高塚古墳が造られた4～7世紀を指す。生活文化の中心は、衣食住という日常生活に使用、消費する物質、用具、器具である。それらは腐朽しやすいものが多く、残ることが少い。衣料は絹、麻、樹皮等の繊維で作られる。羽毛や毛皮も用いられたかもしれない。これらは古墳に埋葬された人の衣服や鏡の紐緒、袋等で稀にみられることがあるが、完形品は殆どみられない。服装の形状は埴輪や壁画等であらましがわかる。

食物は有機物であるから、衣以上に消滅し易く、獣や魚の骨、貝、ナッツ類の殻、炭化した米や粟等から、かすかに窺い知るに過ぎない。文献で食物の名称など分るが、名称と実物の一致を知ることとはむづかしい。しかし食器の中で、木器類は消滅して残らないが、土器はよく残り、調理、貯蔵、飲食状況の一端は察することができる。弥生時代に渡来した稲米は、古墳時代に次第に普及し、主食となってきた。野菜類は今日に比し、種類は少かった。海藻や貝、野獣肉、ナッツ類は現在以上に多く食べたであろう。

住は木、竹、藁、芦、菅、蔦の類を材料とし、いずれも腐朽しやすく残ることが少なく、僅かに柱の根本が掘立柱穴に残るばあいには、どんな樹を使用し、どう加工したか等が推測されるにすぎない。家屋の形状は、家屋文鏡の画や埴輪、神社建築の形式から推定される。その他は文献とあわせて推考されるのである。

ケの文化、日常生活に対して、ハレ（晴）の文化、すなわち祭儀の生活用具などは、金属や鉱物質の石などで堅牢に作ったものが少なく、残り易い、鏡や玉等がそうである。剣や矛、弓矢楯等も武器であると同時に祭器であった。

武器の多くが、堅牢性を求めて金属で作られたことはいうまでもない。ただし鉄は錆びやすく、錆びると変形したり、もろくなって完形品が残りにくい。わが考古学資料室には創設者、末永雅雄名誉教授が復原された挂甲、短甲の甲冑実物原寸大の模型があるのは、非常に貴重である。

日本の古代人は玉類を非常に愛好した。古代中国人も玉を愛用したが、日本人は中国人とは異なる玉製品を作り出した。勾玉はその典型であるが、鉄

形石、車輪石、石釧などもそうであって、もと貝類を用いたものを、石で作った。すなわち鉄形石はテングニシ、車輪石はカサガイ、石釧はイタボガキ、サルボウ等の二枚貝を使用した名残とされている。それに違いはないが小宮山氏寄贈のニューギニア原住民の製作した二本の猪牙を組み合せたものは石釧に酷似している。勾玉の起源が動物の牙であることは、よく知られているが、石釧についても、こうした見地も参考してよい。

わが資料室の最も重要な所蔵品に重要文化財に指定されている石枕がある。伝景行陵出土で、わが国の石枕中、最高のものである。古代の王者、貴族が、日常の寝具として、こうした枕を使用していたか、それとも、この枕は葬祭具であるかが、問題である。おそらく後者であろう。

鉄形石などの石製装身具も果して、日常に装飾用に身につけていたか否か。とくに腕につけていたかどうか。こうした大形の石を腕輪としていたならば、活動に不便であろう。不思議なのは琴柱形石製品で、未だにその用途は解明されていない。

装飾品に鹿角装のものが少ない。そして文様に直弧文が使用され、この文様は日本独自のものであるが、その文様の起源も諸説があり、今後さらに研究が望ましい。

埴輪なども葬祭用があつて、古代の祭儀を支える上に役立つ、5世紀頃から出現する馬具も古墳時代中期以後の生活を考える上に、重要資料で、武器、甲冑とあわせ、古代の戦闘を考える上に大切である。楽器その他、考察すべきものが多いが、公開講演にゆずる。



肩庇付冑・挂甲及び装具の附装(復原)

箸墓についての若干の所見

網 干 善 教

今年8月6日、千葉県佐倉市に開設された国立歴史民俗博物館を訪れた。広大な面積と壮大な建物で、さすが国立の博物館であると思った。しかし展示品はレプリカが多く、日常実物の遺物を観察している者にとっていささか失望するところもあったが、だからといってそれは全く無意義ではない。その理由の一つに展示されている箸墓の復原模型は考古学、特に古墳研究に多くの示唆を与えるものである。

展示室内には見学者が自由にいただける半紙半裁の問題提起を印刷した解説書ともいえるものがある。その一枚の「前方後円墳の時代」に次のような説明文が記載されている。

「埋葬施設や副葬品については何も知られていないが、墳丘上で採集されている特殊埴輪や土師器の型式から、最も古い段階の古墳であることが知られている。墳丘の形態も、古墳時代中頃の完成された前方後円墳にくらべると特異な点が多く、その初現的な姿を示すものとして重要である。径156m、高さ30mの巨大な円丘（後円部）に、長さ126m、先端部の幅132m、同高さ16mの先端部が楔形にひろく方丘（前方部）を接続させた形態の墳丘が復原できる。埋葬が行われていると思われる後円部は4段に築成され、その上に径42m、高さ5mの円丘をのせる。前方部はその上面の先端の細長い平坦部からゆるやかなスロープをなす鞍部をへて、後円部の第4段上面につながっており、前面は4段に築成されているが、側面には段築はみられない。」

（以下略）

展示された箸墓の復原模型をみると、今まで考えてきた古墳とはいささか異ったものであることがわかる。ただここに書かれているように、前方部を方丘とみることに主観的な差位がある。

ところで特に他の前方後円墳を相違することは、前方部の左右両側面に重成の壇築がみられないことであり、またクビレ部から後円部に接続するところにも壇成はみられない。さらに後円部頂には円丘のものがあるということである。

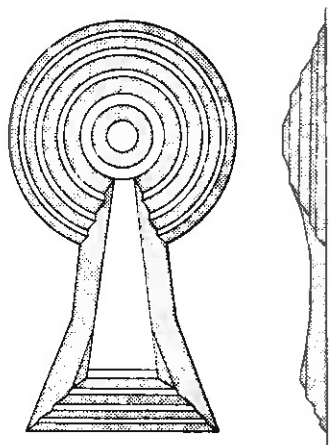
前方部から鞍部そして後円部に連るスロープ状

の施設をみると前方部が祭場的な役割をもっていたとも考えられないことはない。しかし、そう考えるとすると、前方部があまりにも高すぎることで、またその位置に至る方法の問題、そしてクビレの鞍部から後円部頂に至る傾斜の問題などかなり検討を要する点がある。

前方部の両側面に重成の壇築がみられないことは他の古墳の場合と比べてどのような意味をもつものであろうか。もし箸墓が前方後円墳の初現的なものであるとするならば、そうした段階から応神、仁徳陵にみられるような墳丘全体が相似的な重成へ変化する理由は何によるものであるかということも検討する必要がある。

後円部頂上における円丘にも問題がある。この位置における壇の築成は基本的に方形壇と円形壇とがある。この場合、その両者の間にどのような相違性があるのだろうか。これまた古墳の築成に関する重要な問題である。それにしても考古学的調査によって、どの程度明確にできるかという方法論的な可能性の問題も考えてみなければならないであろう。

次に説明文に「墳丘の周りに馬蹄形の周濠の存在を推定する説もあるが、現状では確認できない」とある。確かに「周濠状のもの」はあるが、「周濠ではない」とする方がよいであろう。そうすると、その低地となっている部分は一体何であろうか。私見では、以前から「墳丘築造に要した土を採集した痕跡であろう。」と考えてきた。墳丘を中心に低地状の形状、状態を観察すると以上のように推定することもあながち無意味ではなからうと思う。



箸墓古墳墳丘想定復元図

二人のエジプト学者

—国際学会のひとつ—

加 藤 一 朗

去る8月31日から9月7日にかけて、東京と京都とを開催地として、第31回国際アジア・北アフリカ人文科学会議が行なわれた。このような人文科学万般にわたる国際会議が開かれたのは、わが国では初めてのことであるまいか。集った内外の学者の数は約2千人、発表者は延べ870人にのぼる大会議であった。当初筆者はひっそりと聴講者たちの末席につらなるつもりであったが、総裁三笠宮崇仁殿下のお言葉によって、殿下の統率するオリエント部会（9月1日）の副司会者の1人にえられ、とりわけこの日は部会の進行と発表者への質問などに全神経を集中した。発表は英語または仏語という規約があったが、参加者全員の言語的理解力が考慮されて、発表も質疑応答もすべて英語で行なわれたので、仏語に弱い筆者も辛うじて大役を果たすことができた。会議名の中に北アフリカが加えられているのは古代エジプト文化の重みが第1の理由であることはいうまでもない。海外から参加したエジプト学者（エジプトロジスト）は2名、フランスのJ. ルクラン教授とポーランドのK. ミスリーヴィッツ教授とであった。おふたりとも他の部会でも発表されたが、紙面の都合もあり、オリエント部会——会議全体の中では第2部会と位置づけられていた——における両教授の発表の模様を——簡略化しつつではあるが——お伝えしたい。



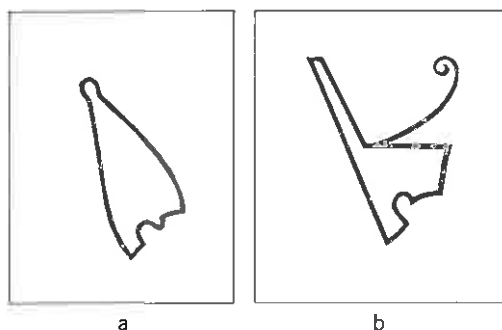
A

部会全体としてのテーマは「古代中近東における君主国と社会的・宗教的伝統」であった。先に発表されたミスリーヴィッツ教授の題目は「古代エジプトの神と王との同定（アイデンティフィケーション）の図像的・文学的・政治的諸相」で、多くのスライドを用いて立

論された。（スライドをお借りして写真版を作る時間的余裕がなかったので、同教授の諒解のもとに、ここにはスライドと同種の写真2葉を教授の論文の中から転写することにする。）さて、エジプトは多神教の国であり、王（ファラオ）の化身とされた神がみもホルス（タカ神）、ハゲタカ女神、コブラ女神等々決して単一ではない。では教授は題目の中で「古代エジプトの神（God）」とされ、なぜ「神がみ（Gods）」とされなかったのか。教授の主張はこうであった「王が種々の神がみと合体していたことは知っている。しかし、ヘリオポリスを聖地とする造物神アトゥムこそ王と同定するのにもっともふさわしいのである。王はアトゥムであり、アトゥムは王であったのだ。このアトゥムの姿（写真A）こそはまさしく典型的な王の姿であって、上エジプト王としての白冠（図a）と下エジプト王の赤冠（図b）の合わさった二重冠をいただき、王特有のスカートををはき、王者のしるしであるライオンの尾までうしろにたらしめている。王とのちがいは、頭上に象形文字でアトゥムと書いてあることと、真直な王のあごひげに対して下端が上にそりかえった（神としての）あごひげをつけていることだけだ」と。このあと教授はピラミッド・テキスト（後述、また以下PTと略称する）などを引用して、アトゥム神と王との同定を縷々説明され、最後にうなぎの姿をした珍しいアトゥム神（写真B）を披露された。この場合でもうなぎの前に二重冠をいただく人頭がそえられてアトゥムが王であることを示しており、写真全体を見渡すとかまぐびをもたげたコブラ（王の1化身）を連想させる。教授の発表後ルクラン教授から「アトゥムの言語学的意味をどう考えるか」という質問がなされた。それに対する答えは「アトゥムの意味については2説ある。その1つはall（全）、perfection（完全）と解釈しており、も1つはnothing（無）と解している。自分としては前者に従いたい。なぜなら、自分自身を創造し、天地を創造し、人間を創造し、神がみを創造した造物神アトゥムには完全さがふさわしいと思うからだ」というものであった。私事にわたって恐縮

であるが、この発表の中で筆者が非常な感銘を受けた点が1つあった。それは、エジプト史の研究にあっては、出土史料の多寡^{たう}ということもあって、従来上エジプト（カイロ以南）の研究に重点がおかれすぎていたきらいがあったのにたいして、教授の発表の中に下エジプト（ナイル・デルタ）の重要性の強調がかいまみられたことである。この点こそは筆者がここ数年来思考し、不十分ながら発表もしてきたことと一致していたのである。筆者は宗教都市ヘリオポリスが下エジプトに属することを重視してきたのであったが、教授は政治都市（古王国の都）メンフィスをも下エジプトに属するものと見なされていた。いいかえると、古王国は下エジプトを基盤とした勢力であったということになるのである。これは筆者にとって全く新しい見解であって、今後の筆者の研究に大きな指針となりそうである。

続いておこなわれたルクラン教授の発表の題目は「PTに関する新たな研究」であった。PTとは古王国に属する第5・6王朝の諸ピラミッドの中に刻まれた、死後の王の安寧を約束する呪文集で、世界最古の大宗教文書といわれるものである。同教授は戦後フランスから派遣されたエジプト遠征隊に参加された折、第6王朝のペピ1世とメレンレー王のピラミッドの内部に残されていたPTの断片をたんねんに収集・整理・復元されており、やはり多くのスライドを用いて復元の過程を詳細に説明し、同テキストについての該博な知識を披露された。教授は本来ナイル上流地域（ヌビアおよびスーダン）の遺跡・遺物（とくに、エチオピア王朝とよばれる第25王朝のもの）の研究家として著名であるが、エジプト史全般にわたって造詣が深く、現在フランスのエジプト学者の中の第一人者であり、本部会では部会としてのテーマにあわせてPTの話をしたわけであった。教授の発表後、今度はミスリーヴィーツ教授が「PTはエジプト最古の文書の1つであるが、各語の複数形はどのように表記されているか」という質問をされた。答えは「ヴァラ



エティにとんでいる。名詞を表わす象形文字を3回連ねる方法、象形文字のあとに3つの点を描く方法、3つの点の代りに3本の棒線をひく方法、この3つの方法が混用されている。この混用については、エジプト人が限られた文脈の中で同一の表記法をくりかえすことを好まなかったということがいわれている。しかし、時がたつにつれて、複数の表記法も次第に組織化されていったようである」というものであった。筆者にとっては、PTとコフィン・テキスト（中王国時代を中心に貴族や富者の木棺に書かれ、彼らの来世の安寧を祈った宗教文書）と「死者の書」（新王国以降一般人の墓の中におかれた同種パピルス文書）という3つの宗教文書の間の関係がもっとも知りたいところであったので、部会終了後、この点について教授に個人的にたづねた。教授は「3文書ともそれぞれの研究がまだまだ充分とはいえない。それゆえ3者の関係の解明にはさらに一層の時日を要しよう」と答えられた。



B

パプア・ニューギニア南西岸のカヌー

橋 本 征 治

筆者は1979年のトレス海峡諸島調査の際に、生まれて初めてカヌーに乗る機会を得た。ニューギニア島の大河、フライ川の河口に近い泥海を、丸木舟にアウトリガーを張り出し、帆をかかげたカヌーは順風を得て、心地よげに走った。アウトリガーが波を打つ規則的な振動に身をまかせ、飛び散るしぶきの光彩をボンヤリと眺めていると、時間の無い世界に身をゆだねているような錯覚にとらわれ、太古の人々もこれと同じように小さな、危うい筏や丸木船を操って漁をし、時には広漠とした太平洋を航海し、数千キロも離れた遠い島々を訪れたのだろうかと思像していた。

カヌーとは「本来は短い巾広^{カヌー}な権^{カヌー}であやつる小舟」(世界大百科事典、平凡社)を指し、丸木を掘り込んだ丸木舟、獣皮を編んだエスキモーのカヤック、チチカカ湖やエジプトの葦^{カヌー}を束ねて編んだ葦船、樹皮を編んだものなどがある。オセアニアでは丸木舟(以後、単にカヌーと呼ぶ)が一般的である。有名なハッドンとホーネルの共著、『オセアニアのカヌー』をひもとけば、一口にカヌーといっても、その姿形、構造、材料は多様であり、その用途や航法にも差違がみられる。大まかには、単胴か双胴かによって、またアウトリガー(舟を安定させるために舷の真横に胴と平行に突き出たフロート)や帆の有無によって大別される。ニューギニアにはこれらのいずれのタイプもみられるが、今回紹介するパプア・ニューギニア南西岸の村々では帆付・単胴のアウトリガー・カヌーが一般に使われており、帆をもたない小型のカヌーは



タタク(single outrigger canoe)

小河川沿いの近距離移動にもっぱら使われていた(アウトリガーは付いている)。アウトリガー・カヌーには、アウトリガーが右舷側にのみ付いているタタク“tatau”と、両側に付いているモトモト“motomoto”(motoは家を意味する)がある。モトモトの方が大型であり、主として遠距離航海に使われ、その数も少ない。筆者が調査したカダワ村では各クランに一艘^{カヌー}、カタタイ村では全村で一艘しかなかった、その所有は個人に帰属するが、共同で利用されていた。小型のタタクの方は、おおむね各家族または親族単位で所有され、個別利用されていた。

次にカヌーの造り方を記す。まず、①森林に出かけて適当な大木(この地方ではネゲ“nege”と呼ばれる硬木、フライ川流域ではクルミ“krumi”と呼ばれる硬木、その他に西洋杉に似たアバイ“abai”など)を捜し出し、②木の周辺の雑木や草を切り払い、③大木を切倒し、④枝を切り払い、適当な長さに切断し(2~3ヵ月間、放置して乾燥させる)、⑤できるだけ芯に近い部分が船体になるようにして、不用な外側部分を削り取る(一連の切削作業には、昔は石斧が使われたが、今ではオダオダ“odaoda”と呼ばれるチョウナが使われる)、⑥ついで内部を削りとり、⑦焼いたあと、船体の内外を滑らかにする(この“焼き”は船体を硬くし、防水性を高める効果をもつ)、⑧板張り、アウトリガー、マストなどの取付け・^{カヌー}艀装という手順である。なお作業場所は、②~④の段階までは森林の中で、⑤~⑦の段階は作業に適した場所(最寄りの浜辺や川辺)に移して行なわれ、仕上げの⑧の段階は村でなされる。製作にあたっては、経験を積んだ長老の指導のもとに、船主の親戚や友人が主として手伝い、クランの人々も協力する。

しかし、沿岸部のこの地域では、カヌー用の良材が得にくいので、主としてフライ川沿いの村々(特に、河口部ディビリ“Dibiri”村のものは昔から有名)からカヌー本体を購入(20~100キナ、邦価換算7,000~35,000円。昔はこれらの村を襲ってカヌーを略奪することもあったという、注のP. 202)して、村では艀装だけを行なう。高価なカヌー

(主としてモトモト用のもの)の購入にあたっては、グ・カラダブアイ“gu karadabuai”というクラン・ミーティングを催して、資金が募られる。このように、クランを基本的な社会単位とするこの地域では、カヌーの購入、製作といった“一大事”はクランの共同・扶助と相互利用、換言すればクランのコントロールの下に行なわれていることがわかる。

アウトリガー・カヌーは構造的には、本体“pe durupi”、ペ・ハリマ“pe harima”と呼ばれるアウトリガーのフロート部分(両者をつなぐ数本の横木は、ツグ“tugu”と呼ばれ、縁板“sabi bodo”と本体との間に挟み込まれているので、肋材の役割を果たす)、マスト“maso”、帆“hawa”、舵“warega”よりなる。ペ・ハリマとしてはアバイの木、ツグには弾力性のあるマングローブやハイビスカスが使用される(ペ・ハリマが海面を打つ衝撃は大変強いので、よくしなう素材でないと、船体が破壊されてしまう)、ペ・ハリマとツグをジョイントする数本の支え木“harima pato”もマングローブの小枝で、衝撃を和らげる役目をもつ。帆は、タタクには一つ、モトモトには二つ装備されており、その材料は、昔はパンダナスの葉を編んだものだったが、今では麻袋などを接ぎ合わせた布帆が多い。舵の役割を果たすのはワレガ“warega”と呼ばれる偏平(やや反りがつけられている)な板で、左に曲がりたければ左舷、右に曲がりたければ右舷の各木枠の間にこの板を差し込み、水面下に突込めばよい。そのつける深さによって曲がる角度は大きくも小さくもなる。今一つの構造的特徴は、他のメラネシア地域にもみられるものだが、本体の舷上端に板を積み足して嵩上げ



カヌー造り(長老の指導の下に、クランの人々が協力)

をしている点で、この縁板は船体を大きくして積載能力を高めるとともに波除けの役割も果たす。なお接ぎ目のところにはポロタマ“porotama”の樹皮からとれる非常に薄い皮を幾枚も挟み込んで、樹脂やコールタールで目ふさぎして防水性を高めている。

以上のように、若干の変化は認められるものの、カヌーの基本的な構造や製作方法については、ハッドンが報告している20世紀初頭の頃のものとはほとんど変わるところはなく、今もこの地域における唯一ともいえる海上交通手段として、カヌーは重要な役割を果たしている。ハッドンはこのバブア・ニューギニア南西岸のアウトリガー・カヌーとインドネシアのそれとの類似性を指摘して、西方よりの伝播を示唆している(注のP.204)、ともあれ、カヌーの比較研究は太平洋における文化伝播、民族移動において要をなす交通手段を明かす意味で、非常に重要である。

注: A.C. Haddon & J. Hornell: *Canoes of Oceania*, 1st Print 1936~1938, Reprint 1975, Bishop Museum.



モトモト(double outrigger canoe)



フロート(腕木が支え木でジョイントされている)

橿原市千塚資料館のことども

岡 幸二郎

昭和52年橿原市によって資料館建設が新沢千塚古墳群の隣接地に計画され、翌年千塚資料館として開設発足をみた。

千塚資料館と名づけられた理由は、その周辺一帯が全国的にも著名な群集墳地帯であることによるもので、新沢千塚古墳群は、昭和51年3月31日付で国の史跡として指定されている。

橿原市千塚資料館は橿原市川西町858の1に設立され、その隣接地には老人福祉センター千寿荘、サイクリングターミナル千輪荘など市民の憩いの場として、また研修宿泊施設として広く活用されている。

千塚資料館のあらましをみると次のとおりである。

『私たちの郷土、橿原は、古代における政治、文化の中心としてめぐまれた自然と古い歴史を今日に伝えています。

大和三山を中心とするすばらしい自然環境の中に日本の歴史とともに歩んできたこの地は、貴重な文化遺産をとおり、現代の私達に多くのことがらを語りかけてくれます。

市内のいたるところでみかける数多くの貴重な文化遺産を私達は永く後世に伝えていかなければなりません。

千塚資料館の周辺一帯は、史跡新沢千塚古墳群で、約800基の大きささまざまな古墳が松林や竹林の中に点在しています。現在、古墳群の史跡公園化が進められており、一部では整備が完成していますので遊歩道を散策し、野外博物館として活用していただけます。

館内には市の調査による考古資料を始め市民のかたがたからご寄贈をうけた歴史資料、民俗資料など「橿原の歴史」に関するさまざまな資料を展

示し保管しており郷土資料館として活用していただければ幸いです。』と記している。(原文のまま)



千塚資料館外観

以上解説の中でも資料館の在り方と特色を挙げ、野外博物館構想をも強調している。

資料館をとりまく新沢千塚古墳群の考古学的成果は申すまでもなく、わが古代国家形成における重要な歴史的評価においても重要な事象としてとらえられている地域であり、その中に位置づけられる資料館としての役割とその意義は極めて大である。

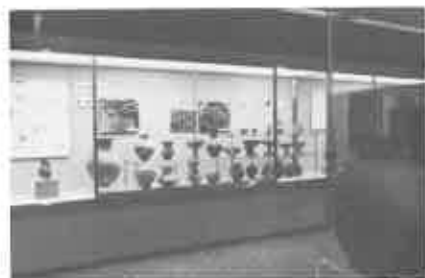
地域資料館としての千塚資料館は、橿原市にとって市民あがての文化財保護の涵養と、その啓蒙普及の拠点としての「場」として設置されたものと理解できる。

文化都市橿原と標榜する以上、文化行政の一貫として永遠に文化財に対する一指針を与えたものであり、今後より一層の飛躍発展の期待できる資料館であってほしい。

近時、全国的な傾向として各地の資料館、博物館の建設が日を追って増加しているが、各々の館が当初の理念と構想を発揮しているのが何館あるだろう。

今、卒直にいつて夫々の資料館にとって反省すべき段階にきているのではないだろうか。何れをみても同一企画の枠に仕組まれているかの観すら覚える。夫々、学芸員の独自の計画性が発揮されねばならないだろう。「器作って魂入れず」に終わらないように今一度警鐘として受止めるべきであろう。

千塚資料館でも当初の状態は市と財団による両頭運営の形で五年経過し、本年からやっと完全移管を契機に旧態を脱皮し、愈々本格的に実動を開始し始めたのであるが、資料館としての使命と役割を「独創的な理念」と「無限の展望」を実現すべく地域資料館として独立歩歩成長発展を願う資料館の一つでもある。



展示室

昭和58年度調査報告「東北地方」

昭和58年度考古学等資料室の調査として、角田芳昭主任と福島、山形、秋田県下の遺跡踏査を行った。そのうちいくつかの点で知り得たことを記録しておきたい。

先ず、歴史上白川関として知られる白川市及び玉川村に切石でもって構築された古墳があり、それを同市文化財調査担当者の根本信孝氏を煩して見学することができた。

その1基は白河市谷地久保（やじくぼ）古墳で明治頃古墳があると記録されているもののそれがどこにあるか所在不明のまま近年に至ったが、やっと確認されたという珍しい経過がある。古墳に至るには道はなく背丈け以上の雑草が生えていることから、根本氏がわれわれが見学したいという要望をうけて前日までに草を刈り、通り道を開いておいて下さったという。

古墳は截石造りの構造であって、現状は側壁2面と奥壁石が残存し、入口のところに切石1個が転っている。床面には土砂が流入しているから全容は知ることができないが、底石があるように思えた。

もう1基は石川郡玉川村にある宮の前古墳で、截石造りで前室を備えた立派な古墳であり畿内地方の横穴式石室と比較しても何らの遜色がない。ただ調査の面で見取図程度のもので以外に正確な実測図もなく、学術的資料になるようなものがないのが惜まれる。

安達郡本宮町木之内天王塩古墳から多くの埴輪が出土したとの話を聞き、本宮町立歴史民俗資料館の山崎義夫氏の配慮によって本宮町教育委員会所轄の整理中の遺物を実見した。

古墳周濠をめぐって配置された埴輪円筒棺や出土した多量の埴輪群をみて東北古墳文化の様相の一端を知り得た。

会津若松市では畏友穴沢咏光氏に案内を乞うて会津大塚山古墳及び寺院跡、仏教遺物などを見学した。

山形市では天童市教育委員会の川崎利夫氏を訪ね、山形県下の考古学の調査、研究の現状について教示をうけ、山形市の中央にある霞城跡公園内の山形県立博物館を訪ねた。そして考古学、民俗学の展示について学芸員諸氏から説明をうけると共に、川崎利夫氏をはじめ県立博物館学芸員から、



福島県石川郡玉川村宮の前古墳の全景

本学が所蔵する考古学遺物の出土地点、遺跡の現状、最近の調査状況、そして現在の正確な地名呼称など台帳整理を行った。

秋田市においては、先ず秋田大学鉱山学部付属鉱業博物館を見学した。ここは秋田という鉱山資源に富む地域の大学として鉱山学部があり鉱業博物館が付属設置されていることは著名である。明治43年開校と同時に鉱山地質関係標本室が設置されたのがはじまりで、現在の立派な建物（鉄筋3階建、本館＝列品室、研究室＝4階建、別棟2階建の文献資料庫）で、これは昭和36年、鉱山学部創立50周年記念事業として卒業生、在学生、旧、現教職員、地元県市町村、篤志家の寄付金によって建てられたもので、天皇、皇后両陛下も行幸啓されている。関西大学100周年を迎えるにあたって博物館の設置を思いながら見学した。

秋田市の北郊外に昭和56年開館の秋田県立博物館がある。先日の日南海中部地震の被害をうけて建物の一部の補修工事が行われていたが、島山芳郎館長、門間光夫副館長、磯村朝治郎主任学芸主事の案内を得て当館所蔵の考古学、民俗学的資料を見学した。特に門間副館長は本学所蔵遺物の出土した秋田市内の遺跡の現地まで案内の労をとって下さった。

秋田城跡は古代の官衙跡にあり、先年の発掘において計帳を記載した紙片が出土したことがよく知られている。

当日も正殿の囲廊跡の発掘調査が続行されており、調査担当の小松正夫氏から発掘調査の現状を出土品の実見説明をうけた。

今回の東北巡検は以上のような意味で多大な成果を挙げることができた。（網干善教記）

池大雅墓碑拓本について

角 田 芳 昭

池大雅（1723～1776）は日本南画の大成者として著名であり、多数の研究書が刊行され、現在も彼の芸術の心をつかもうと、書であれ、画であれ、伝記であれ諸々の論究が発表されている。

本学考古学等資料室においても、約1500余点の中国・朝鮮・日本の金石文拓本を所蔵しており、その中には大雅堂の墓碑拓本も含まれており、今回表装も成ったので、ここに紹介してみたい。

大雅の墓碑は京都市上京区寺之内千本東入ル「浄光寺」（住職森野現弘師）の墓地内にある。当寺の入口の左側に池大雅墳墓道の道標があり、右側に「大雅の墓所」として解説板が建ててある。寺内に入り中央くぐり戸を開けて進むと、つき当りの北西の隅に屋根をつけた風格のあるお墓があり、これが大雅堂のお堂である。

正面に「故東山畫隠大雅池君墓」と篆書で書かれ高芙蓉の筆になるものである。この両側と背面に韓天壽の筆による楷書体の陰刻で大雅の梗概を書き、この銘文は大雅と深い交りのあった大典禪師（薫中・竺常）が作文したものである。この建墓より200年余りが経過し、石の風化が甚だしく、銘文の下部の20文字は字形が完全に消えてしまっており、他の文字も読みづらく、約70～80文字が読み解けない状態となっており、徐々に消滅の運命に直面している。残念なことであり、何とか保護し後世に残したいものである。

この墓碑銘については昭和51年、佐々木米行氏（池大雅美術館長）が『池大雅墓碑銘』として小冊子を発行されており、貴重な研究である。

本学の墓碑拓本は『大日本金石史』著者木崎愛吉翁（好尚）が『大日本金石史』脱稿後その拓本類すべてを本山彦一氏（元毎日新聞社長）へ譲られたものといわれ、全拓本資料に「好尚所拓」の捺印が見られる。そしてこの大雅墓碑拓本は大正の初年に拓影されたものと伝えられている。そうすると佐々木氏墓碑本中の浄光寺蔵本・大雅美術館蔵本より拓本された時期が早いことになる。そこで

詳細に文字を観察していくと、拓本の巧拙はあるにしても最下部の文字などを比較してみると、本学のものが崩れが少なく、はっきりと拓影されており、浄光寺蔵本が乱れ崩れが多く損傷気味である。しかし、10年程度の差違であるので酷似している。墓碑裏面の銘文第1行下部「異」の文字はどちらも完全に破損し



池大雅墓碑拓影(京都浄光寺)本学蔵

ていて読めない。恐らく幕末動乱期にでも角が崩れ破損したものであろう。他はほぼ読了可能な状態である。池大雅美術館蔵本（旧拓）をみると、「文字もまことに鮮明で韓天壽の書品がよくうかがわれるので、墓碑建設後の間もなく塌ったものと思われる」と記されており、また、これにより破損の「異」の文字も補なわれる。しかしこれには銘文の終りに近いところに「畫」の一字を欠いている。この文字は後世に至り脱漏していたことに気づき何人かが書き加え、現在の姿になったものと思われる。ともあれ、大雅の墓碑銘は最初は柴野栗山に依頼にいき栗山との意見が合わず、大典禪師の銘文となったのである。現今の荒れた墓碑状態を考えるに、大雅の略歴は正しく伝えられたが、後世に残る大雅堂は栗山の考えた如く、大石をもって人様の形状を造り、「たいがどう」と刻んで栗田口に安置していたならば、庶民の大雅堂となり、より広く伝わっていたかも知れぬ。機会があれば大雅堂についての研究と、他の呉春、淇園、華山などの墓碑銘拓本も紹介してみたい。



大雅墓所

故東山畫隠大雅池君墓
池賢成歿矣既表墓焉而未有銘也以爲請余嘗親覽成爲人蕭散不以爲奇驚心善與物和不阿蘭於禮法外疎放而內實修饒與人交謙損而不阿蘭於禮法當往不往當否不否而願諸義未嘗有所失患而弗望廉而弗創其於取予得失淡如也平生行事多出於人之所不意於是有時人目爲賢成生平安幼而穎異學文學書無不能而獨長於繪事圖山水尤妙好遊名岳尤馳進高輿輿無不長檢即取以爲靈輿輿數登富士而每異其路因作畫十圖一百各變狀態皆其所經覽古今畫工所未及也安永丙申四月十三日病卒于葛原御堂距生享保癸卯五月四日得享五十有四葬于舟岡之南淨光寺先塋之側賢成無名無名始名勳遠近皆以大雅堂稱之妻玉彌姓隆山間瑯不節能配夫之行亦能盡夫之志家雖寒世皆知大雅之畫而不知其行其行而不知其心故爲叙其大略如其世則存焉不待論也銘曰
若人胡不壽若人胡不壽庶安子哉淨光之地
安永六季丁酉六月 淡海堂常撰 韓天壽書

大雅墓碑銘文



いし ざら 石 皿

縄文時代の調理用具の一種で、食物性食料の圧潰・破碎・粉化等

に使用されたと考えられる。中央を凹めた皿形の石器で、砂岩、安山岩質のものも多く、円形または卵形のものが多い。早期・中期のものには自然石の表面を凹ませた程度のものであるが、後期になると縁をとり、形も整っており、また下面に4個の隆起した脚をつくったものが発見される。晩期になると中央に島状の隆起した台がつけられたものも多い。中部地方以東から東北・北海道にかけての出土例が多く、西日本・九州地方では数例みられるのみである。

本資料は非常に珍らしく、内部に30数個の凹んだ穴状のものが作られ、中央部に1ヶ所穴をあけている。長径31cmあり砂岩質のもので、果実など破碎の時効果があるのであろう。東北地方出土のものと考えられる。



せき そう 石 槍

長い柄をつけて「槍」として用いる打製石器で、先土器・縄文時

代狩猟具・武具で、弓矢の出現する前後に盛んに発達をとげた。北海道・東北地方に多く、縄文早・前・後期に多い。弓矢が広まってきた後期頃より、槍の存在はあまり必要としなくなり、影がうすくなった。

本資料は北海道紋別郡土湧前村社名淵の出土のもので7~11cmあり、黒耀石製である。35点の収集資料があり、両面加工で、木の葉形を呈しているものや、有舌尖頭器といわれるものもある。石槍の名で呼ばれているものの中には、石剣として利用されている場合も、諸外国の例から推測される。

弥生時代の石槍はやや厚味があり、断面形が菱形にちかい。中期には両側縁が平行した剣身形のもの作られ、西日本で特殊な発達をみた。

資料紹介

せき へ 石 斧

縄文・弥生土器に伴って出土する最も普遍的な石器である。

磨製石斧は断面が扁楕円形を呈するものや、乳棒状、あるいは定角式石斧などがある。ほとんどが両刃であり、すでに早期からみられる。乳棒状石斧は関東・中部地方では前・中期に発達するが、東北地方では後・晩期に多く、遠州形石斧の名でよばれている。定角式石斧は後・晩期の代表的石斧である。機能的には柄と直角についたものと、柄と平行についたものにわけられる。磨製石斧は主として工具であったと思われ、樹木の伐採からその処理にいたるまでの工程に必要で、大形石斧(45cm前後)より小形石斧(3cm前後)まで各種ある。打製石斧は粘板岩や貝岩などの石を打ち欠き製作しており、楕形・短冊形・分銅形などの形態がある。打製石斧の使用目的

は農具とは考えられず、土掘り具、農耕用石鋤などと考えられており、今後の研究が必要である。



どっ こ いし 独 鈷 石

縄文後・晩期に見られる磨製石器であり、形態が密教法具の独鈷に似ているところから「独鈷石」「石鈷」と呼ばれ、一部には両端に刃があるところから両頭石斧ともいわれているものも含まれる。中央に節状の突出部が並んであり、両端は尖頭状になる。

現在の研究では形態から4種類に分類されている。

1. 断面が丸く中央に溝を有し両端は槌のように丸頭となっているもの。
2. 断面が石斧のように扁平形で中央が抉られ、節が高く柄を着装するようにつくられ、刃部が長くのびて真直ぐな形態をとるもの。
3. 2と同様なつくりであるがその気味で三ヶ月形を呈するもの。
4. 特殊形、中央に孔を有するものや中央に隆起した節が発達して角状突起を思わせるようなもの。(但し発見例は少ない)。工具、武器祭祀的な器物と考えられるが、未だ定まっていな



資料紹介

◆資料貸出状況

58. 4 刻字甲骨 20点 (中国甘肅省殷墟出土)
 銅 戈 1点 (雲南省城)
 銅 鏃 13点
 銅 劍 1点
 銅製柄頭 1点
 三角鏃 4点
 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館「中国の都城遺跡」展へ
58. 5 内行花文鏡 1面
 和 鏡 3面
 池田市歴史民俗資料館へ

58. 8 須恵器 11点 (楠見遺跡出土)
 和歌山市教育委員会へ
58. 9 玦状耳飾 2点 (藤井寺市国府遺跡出土)
 NHK 特集「知られざる古代・日本海5千年」番組撮影
58. 9 玦状耳飾 6点 (藤井寺市国府遺跡)
 白 玉 1点 ()
 深鉢土器 1点 ()
 「季刊考古学」(西口陽一氏執筆) 撮影・掲載

編集後記

第8号をここにお届けいたします。今夏は例年になく暑く、冷房のない部屋では扇風機のみが廻り、資料写真撮影には汗だくで奮闘した次第です。

本資料室も開設以来30年が経過し、多くの偉大な先人たちの努力の結果、資料の充実を見、この資料を使い学生達の研究・調査の基礎的学問が行なわれてきた。ここで巣立った卒業生により今年3月『関西大学考古学研究室開設30周年記念考古学論叢』(B5版、1050ページ)が刊行された。ここにおいてやっと一人歩きが出来るようになった。今後の精進を望むものである。

今回も各先生方にご無理をお願いし、玉稿をいただいた。特に橋本征治先生には今回海

外留学研究者として、バブア・ニューギニア、オーストラリアへご渡行されたので、その折の研究の一端をお願いした。ここにお礼申し上げます。

本資料室の行事として、今回初めて資料陳列室を一般公開することが決定された。10月24日より1週間公開され、また公開講演会も開催される予定で、「開かれた大学」構想による地域文化の向上が期待される。

表紙の写真は「刻字甲骨」であり、殷墟小屯より出土したもので、22片を所蔵しており、第1・第2・第5期(武丁より紂まで)のものが存する。亀甲獣骨に文字を刻みトイを行ったものであり、殷代暦法、卜法、祭法等社会各般の事象が研究されている。

〔角田芳昭〕